

## (研究資料紹介) 芹沢銈介作「散華」

福 地 佳代子

Items of interest from the work by Serizawa Keisuke  
“*Sange* (Paper Lotus Flowers Offered to the Buddha)” stencil-dyed by Serizawa Keisuke  
FUKUCHI Kayoko

キーワード : 芹沢銈介 散華 型絵染

### 要旨

芹沢銈介は、古くからの知己であった明石の無量光寺住職小川竜彦師から依頼を受け、昭和42(1967)年に7枚組の散華300セットを制作した。和紙に型絵染を用いた散華はそれまでに例のないもので、竜彦師の歌や仏教的なモチーフを巧みにデザイン化した独創的なものである。芹沢の作品は生活の隅々に行きわたるほど幅広く、また「法然上人絵伝」(1941年)や「極楽から来た挿絵集」(1961年)、知恩院大殿の「莊嚴飾布」(1974年)、「十大弟子尊像」(1982年)等、仏教主題を扱ったものも多いが、散華の存在はこれまでほとんど取り上げられてこなかった。芹沢は、無量光寺の他、大阪の月江寺、京都の知恩院で行われた浄土宗開宗八〇〇年大法要、東京上野の寛永寺現龍院のためと、合わせて4回にわたり散華を作っている。あるものは記念品として、またあるものは莊嚴の具として用いられ、色とりどりの図柄が目にも楽しい。さらに、芹沢自らが色差しを行った試作染の散華を収めた折帖も残されており、散華制作の貴重な資料として注目したい。

### Abstract

Serizawa and Tatsuhiko Ogawa, a priest at Muryoko-ji Temple in Akashi, were old friends. In 1967, at the request of Ogawa, Serizawa made 300 sets of *sange* (paper lotus flowers offered to the Buddha). They are stencil-dyed paper, with original designs.

Serizawa's works are wide-ranging, including many with Buddhist themes, such as *Honen Syonin Eden* (“The Illustrated Life of Saint Honen”) (1941), *Gokuraku Kara Kita Sashie-Syu* (“Illustrations for the Book, He Came from Paradise”) (1961), *Syougou kazarinuno* (“Hangings for the Altar of Chion-in Temple”) (1974), and *Judai Desi Sonzou* (“Portraits of the Ten Disciples of the Buddha”) (1982). However, Serizawa's *sange* have been largely unknown.

Serizawa made *sange* for four different temples: Muryoko-ji in Akashi, Gekko-ji in Osaka, Chion-in in Kyoto, and Genryu-in in Ueno, Tokyo. Some were made as commemorative gifts and some were used for decoration. Their colorful designs amuse the eyes. Serizawa also kept a booklet in which he pasted *sange* that he had colored. These treasures will be the subject of continued analysis.

### はじめに

芹沢銈介のご遺族のもとで大切に保管されている遺品の中に、試作として染めたと見られる散華を貼り付けた折帖がある(口絵4)。芹沢の幅広い仕事の中で散華が取り上げられることはあまりないが、草花や楽器、雲や流水といったモチーフによるリズムカルな模様や、明るく伸びやかな色彩には、芹沢作品の魅力がよく表われている。また、同じ図柄で配色やばかしの異なるものが複数見られることは、これらが色差しの検討に使用されたことを示唆している。芹沢の制作過程

を窺わせる点でも貴重な資料といえよう。

散華とは、元来仏教の儀式において仏を讃嘆し莊嚴するために撒かれた生花に起源をもち、やがて布や紙で蓮の花弁を象ったものが散布されるようになった。日本へは仏教と共に移入されたと見られ、『東大寺要録』には天平勝宝4(752)年4月9日の大仏開眼会の際、堂内が種々の造花や美妙的な繡幡で莊嚴され、堂上にさまざまな花が散り供養されたことを伝えている<sup>1)</sup>。紙製の散華で現存するものとしては、正倉院御

物の「緑金箋」3枚が挙げられる。花卉形に裁断された緑麻紙で、長約25cm、幅約15cm、片面に金箔を砂子のように細かく撒き散らした、シンプルにして美しいものである。

ただし、紙や布の散華に図絵を施すことが一般に行われるようになったのは、さほど古いことではない<sup>2)</sup>。特に、美術散華と称される、作家の原画を元に木版刷りで制作されたデザイン性の高い散華は、近代以降に登場する。絵画的な散華としては、大正10(1921)年に法隆寺で行われた聖徳太子一三〇〇年御聖諱法要のものが知られており、3枚組で、各葉に「迦陵頻伽」「寺院の遠望」「天人」を描く。以後、法隆寺では聖徳太子一三二〇年法要(1941年)、聖霊院修理落慶(1948年)、五重塔修理落慶(1952年)、金堂修理落慶(1954年)、聖徳太子一三四〇年御聖諱並びに聖徳会館落慶(1961年)等で、法隆寺に因んだ図柄の散華が作られた。

原画の制作者の名が表に出てくるのは、昭和27(1952)年、東大寺の大仏開眼一二〇〇年記念法要での絵・杉本健吉、題字・平岡明海によるものが早く、徳力富吉郎作(唐招提寺鑑真大和上一二〇〇年御諱 1964年)、前田青邨作(法隆寺金堂再現壁画完成法要 1968年)、平山郁夫作(法隆寺聖徳太子一三五〇年御聖諱法要 1971年)といったように、奈良の諸大寺を中心に広まっていった。こうした動きが起こった背景には、この時期に寺社の修復や復興が多く行われ、その記念法要において参会者に配るべく、記念品としての散華が作られるようになったことがある。

芹沢が初めて散華を制作したのは、昭和42(1967)年、72歳の時のことで、かねて親交の厚かった兵庫県明石市の無量光寺住職小川竜彦師より、自らの逆修供養会のためにと依頼を受けたことによる。奈良で美術散華が徐々に広がりはじめた時期に当たるが、作家制作の散華は原画を元に木版刷りされるのが一般的な中で、型絵染による散華は類をみない。その後は、昭和42年の大阪・月江寺における本堂落慶記念、昭和49(1974)年に京都・知恩院で開催された浄土宗開宗八〇〇年記念大法要、昭和56(1981)年頃の東京上野・寛永寺現龍院と続き、合わせて4回の散華制作を確認することができる。本稿ではこれら4件の芹沢散華について取り上げると同時に、芹沢自らの色差しになる貴重な試作染の「散華」(折帖)について紹介したいと思う。

## 芹沢銈介作「散華」の概要

### A 芹沢銈介作「散華」7枚 畳紙付 (以下、無量光寺本)(図1)

紙本型絵染 昭和42(1967)年

各葉 縦約13.3cm×横約10.3cm

畳紙「散華 無量光寺 雲誉竜彦」

散華の1枚に、「雲誉逆修供養会 昭和四十二年七月十日 於明石市 浄土宗 無量光寺」の文字が染められている(図1-1)。兵庫県明石市にある無量光寺の先々代住職であった小川竜彦師は、68歳の誕生日である昭和42年7月10日に、自らの逆修供養会を執り行った。逆修会とは生前に死後の供養を行うもので、この日の立ち会いはごく内輪の人々であったが、竜彦師はこの逆修会を機に、長年の一枚起請文に関する研究の支援者をはじめ結縁の人々へ贈呈するため、芹沢銈介作の散華300組の制作を企図されたのである。

散華は片面にのみ図柄を染め出し、7枚を一組として畳紙に包む。内3枚には竜彦師が逆修会において表白に代えて詠まれた歌が表わされ、他には法然上人像、阿弥陀仏像、無量光寺の山門、「南無阿弥陀佛」の六字名号が、それぞれに描かれている。

「琳誉開山の出で入りましゝ四脚門 三つももとせをすぎて影ふむ」(図1-2)、「認識 南も阿弥陀ふちの声を超ゆるなる真実を日びの命のふるよしも無み」(図1-3)、「世を思ひてかにかくに 齢ハふれどいたづらに わが憂ひのみいや増りつつ」(図1-4)の3首が描かれた散華は、1枚ずつ文字のデザインが異なる。(図1-2)は縦に区切った赤、白、青の太いストライプの中に楷書風の文字を当てはめたもので、白地の部分では文字を薄墨に染め出し、赤と青の色地の部分では文字を白く抜く。縞三色のコントラストが鮮やかである。(図1-3)は文字を防染し、薄墨地の背景に紫、赤、青の三色のぼかしを入れたもの。横に流れるぼかしの筆遣いや水気を含む霞のような滲みが美しい。(図1-4)は、連綿体を思わせる自由な筆致に、朱、黄土、萌黄の三色をリズムカルに配す。「いろは文着物」(1954年)などにも通じる、文様化された芹沢独特の文字である。芹沢は、本の装幀をはじめ文字を題材とする優れた作品を多く残しているが、タイポグラフィとしての手腕がここでも発揮されているよう<sup>3)</sup>。



(1-1)



(1-2)



(1-5)



(1-3)



(1-6)



(1-4)



(1-7)

図1 芹沢鉦介作「散華」7枚(畳紙付)(無量光寺本)  
東北福祉大学芹沢鉦介美術工芸館所蔵

(図1-5)に描かれた建物は、無量光寺の山門である。1945年7月6日の神戸大空襲で全山中唯一焼失を免れたもので、彫刻は左甚五郎作と伝わる。竜彦師は戦火をも乗り越えたこの門を大切にされていたという。

無量光寺は浄土宗の寺院であり、浄土宗の開祖である法然上人(図1-6)や、阿弥陀如来像(図1-7)、南無阿弥陀仏の名号(図1-1)が描かれるのは自然であるが、臙脂色の丸窓の中、墨一色で端的に表わされた法然上人像は特に秀逸である。頂が僅かにくぼんだ独特な頭部の形は、法然上人の肖像画に共通する特徴で、法衣の上に袈裟をまとい、両手で念珠をつま繰り、左前方を静かな眼差しで見つめている。法然上人像では、鎌倉時代に描かれた京都・二尊院の絹本着色画が最も有名であるが、素朴さの中に高潔な人となりが滲み出る芹沢の法然像も味わい深い。

竜彦師は碩学で知られ、特に法然上人の研究に熱い情熱を傾けた<sup>4)</sup>。芹沢との出会いは、法然上人の絵伝の制作をかねてよりの念願としていた竜彦師が、絵を任せるに相応しい人物として芹沢に白羽の矢を立てたことにはじまる。絵伝の制作と同時に、法然上人の御影を依頼。昭和13年に日本民藝館に展示された「型絵染法然上人御影」5種は、芹沢の初の本格的仏教主題の作品であり<sup>5)</sup>、その後昭和16年に、竜彦師の詞による合羽刷手彩色の「法然上人絵伝」が完成した。その仕上がりについて、竜彦師は「芹沢氏の御影の持つ光は彼岸の光であり、圓光の光である。同じやうに繪傳の各圖にもかゝる光が全體の上に漂ふていゐるのを感じる(中略)日本の古代からの如何なる佛畫も芹沢氏の浄さと光との一境を開示したものはない」<sup>6)</sup>と惜しみない賛辞を送っている。以後、二人の信頼関係は変わることなく続いたことを考えると、竜彦師の逆修供養の散華の一図に芹沢の法然上人像が選ばれたことは感慨深い。

## B 芹沢鉦介作「散華」3枚 畳紙付 (以下、月江寺本)(図2)

紙本型絵染 昭和42(1967)年

各葉 縦約13.4cm×横約10.2cm

畳紙「散華 浄土宗 月江寺」

「散華 浄土宗 月江寺」の文字の染められた畳紙に入った3枚一組で、一つの散華につき2枚の和紙を張り合わせ、表





(2-1)



(2-4)



(2-2)



(2-5)



(2-3)



(2-6)

図2 芹沢鉦介作「散華」3枚(月江寺本) (左:表面 右:裏面)  
東北福祉大学芹沢鉦介美術工芸館所蔵

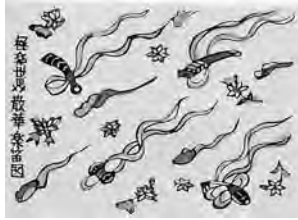
と裏ではそれぞれ異なる図柄を染め出している。

大阪市天王寺区にある月江寺は、元禄10(1697)年、五代将軍の生母桂昌院の両親の菩提を弔うために、桂昌院に仕えた青山修理大夫の息女(東印比丘尼)が開いたと伝える尼僧道場である。昭和20(1945)年3月13日夜の空襲で罹災し、本堂を焼失したが、その後二十余年を経て、昭和42年に念願であった本堂が再建された。この落慶を祝い、本堂建立に尽力された方々に対する記念品として、芹沢散華が制作された。

月江寺の本堂は、京都大原にある三千院の往生極楽院を模したもので、季節の草花が咲く庭園に調和した優美な佇まいを見せる。散華に描かれたお堂の絵(図2-1)は、完成した本堂の写真を送り、それを元に制作されたという。中央のお堂は、鮮やかな青と墨の二色遣いにより立体的に表わされ、周囲の雲には明るい黄色、上下の文字部分には臙脂と紫の濃色が配されることで、明るさの中に堂々とした趣きを感じられる。芹沢散華に描かれた本堂からは、念願の成就を祝う晴れがましさが伝わってくるようである。

他には、鴛鴦と蓮華(図2-2)、「南無阿弥陀仏」の六字名号(図2-3)、七重の欄楯と行樹からなる宝樹(図2-4)、雲間を舞う花々(図2-5)、鼓や銅鈸といった楽器が飾紐をたなびかせ空を舞う様(図2-6)が、描かれている。中で七重宝樹、花、楽器の三図は、一部に墨のぼかしが入るものの地色をほぼ朱一色で表わし、鮮やかさが際立つ。月江寺本の散華は、両面に模様を染め出しているのも、片面を同色で統一したものと思われる。強いというならば、文字があるものや多色模様の面を表、朱一色の面を裏と見ることができようか。

七重宝樹、中空を飛ぶ楽器や花といったモチーフは、阿弥陀の極楽浄土をはじめとする仏の世界を示すもので、浄土变相図の中にもしばしば登場する。芹沢は、昭和35(1960)年6月22日から12月12日にかけて朝日新聞夕刊に連載された佐藤春夫氏の小説『極楽から来た』の挿絵を担当しており、この中で「極楽世界散華楽笛図」(図3-1)や「はじめて極楽の箏笛を聞く」(図3-2)を描いていることから、空を舞う楽器や花のイメージは既に身近なものであったといえる。さらに、『極楽から来た』での経験をより直接的に生かしたと見られる図もある。(図3-3)には、月江寺本と無量光寺本に共通する「南無阿弥陀仏」六字名号の原形を見ることができ、「法上人源空像」(図3-4)、「阿弥陀仏空中往立図」(図3-5)は、無



(3-1)



(3-2)



(3-3)



(3-4)



(3-5)



(3-6)

図3 佐藤春夫著・芹沢銈介挿絵『極楽から来た』  
 (『芹沢銈介全集』3巻(中央公論社 1980年 p30、31、  
 121、139、157)、同26巻(1982年 p49)より転載)

量光寺本の二図(図1-6、7)に近い。また、昭和36(1961)年に書籍化した『極楽から来た』の見返しには、月江寺本にも登場する七重宝樹(図3-6)が描かれている<sup>7)</sup>。以上の類似から、無量光寺本と月江寺本の制作に当たり、モチーフの選定と画面構成の双方において、新聞挿絵での経験が生かされたことが見て取れる。新聞の挿絵は小画面にまとめる必要があり、その点でも散華への応用に適していたといえよう。

なお、月江寺から芹沢への散華制作依頼は、無量光寺の小川竜彦師を介して行われたといい、昭和42年は無量光寺でも散華を依頼した年であることから、同時に制作された可能性が高い<sup>8)</sup>。

#### C 芹沢銈介作「散華」4枚(以下、知恩院八〇〇年法要本)(図4)

印刷(原本:紙本型絵染) 昭和49(1974)年

各葉 縦約12.9cm×横約10.2cm

昭和49年の4月4日から25日にかけて、京都市東山区の



(4-1)



(4-3)



(4-2)



(4-4)

図4 芹沢銈介作「散華」4枚(印刷)(知恩院八〇〇年記念法要本)  
 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館所蔵

知恩院で浄土宗開宗八〇〇年を記念する大法要が開催された。この間の4月23日午後、御忌御逮夜の法要が執り行われた大殿は、導師として昇殿奉修された小川竜彦師の発願・勧進により制作された芹沢作の荘厳飾布(水引・柱巻・打敷)で堂内が設えられ、芹沢作の型絵染め袈裟をまとった竜彦師らが勤行され、芹沢の散華が空を舞った。当日の様子について、竜彦師の回想には次のようにある。

「私の出仕の日も快晴であった。出僧は連日の倍の百五十人と伝えられた。控えの間の小方丈には鏡は無く、私は自分の姿を見る事もなしに、人の目からそれと知るばかりで、牡丹竹の芹沢けさがどう身に添ってゐるかも知らず、導師役をつとめたのであった。大殿内陣中央の高座に上ってから、読経行道の間は手持不沙汰なので、私は、黒く丈見える御本尊と芹沢打敷の大机の上の、陛下の御下賜品と水引垂れ絹などを、次々と念仏申しつゝしげしげと拝見した。流石に高座は第一の見物所であった。ともかく芹沢さんの新作が荘重な気品ある別格の作であることがよくわかった。

私の側近者として、出てくれた四人の役職の方々の芹沢け

さの評判も大変だった。この日、九州甘木から来てくれた「浅井長政」の血の人達は、「極楽のようだ。」と言った。

使った芹沢散華は、一枚も後に残ってゐなかった。」<sup>9)</sup>

この時使用された散華の図柄は4種類。「南无阿弥陀佛 昭和四十九年 知恩院大殿 四月二十三日」の文字を染めたものには、朱と渋木の二色を用いたもの(図4-1)と、墨一色(図4-2)の2種があり、絵模様の散華には、朱色の地に飾紐をなびかせて空を飛ぶ楽器を黄色で表わしたもの(図4-3)と、朱一色で鴛鴦と蓮(図4-4)を染め出したものがある。原本は紙本型絵染で制作されたが、法会で撒くため、それを元に印刷版が作られた<sup>10)</sup>。印刷版では、表に文字のない図柄2種に関して、裏面に「昭和四十九年 知恩院大殿御逮夜 四月二十三日」の印字がなされている。

空飛ぶ楽器、および鴛鴦・蓮の図は、月江寺本の中に既に見られるもので、型紙を再利用したと見られる。違いとしては、月江寺本では鴛鴦・蓮の図に朱、桃色、水色、薄墨、茶色、紫といった多色を用い、ぼかしを施して手の込んだ色差しを行っているのに対して、知恩院八〇〇年法要本では朱一色のみに仕上げていることである。こうした配色を選んだ理由としては、法会で撒くという使用目的のため、散らせた時に映える明快な色を求めたからとも考えられるが、この時の芹沢

の制作意欲が大殿の荘厳飾布に向かっていたことは否定できない。

荘厳飾布は、柱巻の一枚をとっても幅が約1m、長さは6mを超える長大なもので、上方の水引、左右の柱に掛けられた柱巻、前机を覆う打敷が、内陣宮殿を縁取るように設置された。雲間に色とりどりの遠山が連なる上方より、左右に一条の滝が流れ落ち、その水が生命を育むかのごとく松・桜・楓・桐・薄・朝顔・鶏頭・柳・藤・桔梗・菊・牡丹・菖蒲・葵と一斉に花開く。蓮池を表わす打敷には、埋め尽くさんばかりの大輪の蓮華。舞い戯れる田鶴や燕、水中から顔を出す魚や水鳥も楽しげである。まさに百花繚乱の楽土といった風情であり、代表作の一つに数えられる。これ程の大作は芹沢工房を挙げての大仕事であった<sup>11)</sup>。そうした中で、数の仕事である散華には、従来の型を用いるという判断がなされたと推測される<sup>12)</sup>。

#### D 芹沢銈介作「散華」8枚 (以下、現龍院本)

紙本型絵染 1981年頃

現在のところ実物を確認することはできていないが、昭和60年に発行された『これくしょん』94号に、散華2枚のモノクロ写真(裏表で計4点)(図5)が掲載されており、東京都台東区にある寛永寺現龍院からの依頼により、昭和56(1981)年頃に8枚セットで制作されたという<sup>13)</sup>。写真からは、雲間を舞い落ちる花卉を表わした図と、中心に一輪の蓮華をあしらった図が確認できる。裏面には、「南无阿弥陀佛」の名号と二つの落款がある。表面の二つの図柄は、次に取りあげる折帖に貼られた試作染散華に同じものがあり、試作染を通して全8枚の散華を想定することができる。<sup>14)</sup>

#### E 芹沢銈介作「散華」(折帖)(口絵4)

折帖一冊 縦27.3cm×横24.2cm

試作染散華(23枚)貼付<sup>15)</sup> 紙本型絵染

芹沢恵子氏所蔵

芹沢銈介の没後、東京の蒲田にあった仕事を整理した際に長男の芹沢長介氏によって発見され、折帖に仕立てられたもの。表紙は濃紫の絹地で、長介氏の筆になる「銈介作 散華」の題箋が付されている。1頁につき2枚ずつ、見開きで4枚の散華が貼られており、全部で43枚。バランスよく配置

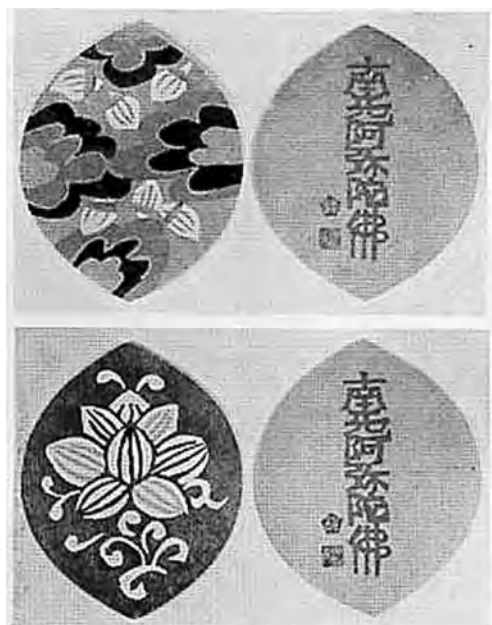


図5 芹沢銈介作「散華」8枚(現龍院本)  
(『これくしょん』94号(ギャラリー吾八 1985年 p12)より転載)



され、目にも鮮やかな美しい折帖である。

43枚の散華の内、4枚は無量光寺本、1枚は月江寺本、1枚は蓮弁形に裁断する前の状態の知恩院八〇〇年法要本に当たる。残る37枚は、無量光寺本、月江寺本、知恩院八〇〇年法要本のいずれにもない図柄で、フリーハンドで切り取ったと見られるややいびつな蓮弁形をしており、外縁の一部に形をとるための鉛筆線が残っているものもある。同じ模様で異なる配色を試みているものが何枚もあることから、試作染と見て間違いない。

図柄は全部で以下の8通り。

- ①楽器(5枚)：楽器は全部で4種と見られるが、一つは不明。琵琶、箏、豎箏篋(ハープ)が描かれ、琵琶と箏は飾紐を棚引かせる。(図6-1)
- ②雲と花(6枚)：尾をひいた雲の塊を上中下の三段に表わし、その間に4つの小花を描く。(図6-2)
- ③雲と花卉(5枚)：大輪の花を思わせる雲を上下左右に大きく配し、その隙間を蓮の花びらが舞い落ちる。(図6-3)

- ④五枚の花卉(5枚)：5枚の蓮の花びらが中央から外側に向かって配される。(図6-4)
- ⑤流水(2枚)：上から下に向かって左右に大きく蛇行しながら流れる水を描く。(図6-5)
- ⑥抽象(5枚)：弧を描きながら上方へと延びてゆく、植物の蔦を思わせる抽象文。(図6-6)
- ⑦蓮華A(3枚)：中央に大きく1輪の蓮華を描く。(図6-7)
- ⑧蓮華B(6枚)：やや小ぶりの蓮華の花。周囲を波文や茎葉をイメージさせる文様で取り囲む。(図6-8)

植物、楽器、雲、水といった事物の形態は単純化され、模様として再構成されている。単純な形であるが故に、彩色による印象の差は大きい。中間色やぼかしを多用し情緒豊かな仕上がりのものであれば、明瞭な赤・青・黄色のポップな色味や、一色ないし二色に色数を抑え、コントラストの妙を感じさせるものなどさまざまである。しかし、そのいずれもが美しい色彩の調和を見せており、考えるより先に手が動いたであろう芹沢の類稀な色彩感覚が窺われる。



(6-1)



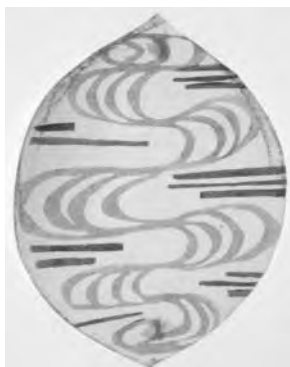
(6-2)



(6-3)



(6-4)



(6-5)



(6-6)



(6-7)



(6-8)

図6 芹沢銈介作「散華」折帖(部分)

先に指摘したように、『これくしょん』94号に掲載された写真から、図柄の③と⑦は現龍院本と一致することが分かるので、これら8種37枚は現龍院本のための試作染として制作されたということができよう。

型絵染という技法において、試作染には特別な意味がある。型を用いる芹沢の作品では、全ての工程を芹沢自身が手掛けたものの他に、芹沢の指導のもと糊置きや色差しを別に委ねる場合がある。散華のように数を必要とする「多の仕事」においては、染めを志し芹沢のもとに集った弟子の手による協働制作がとられた。すなわち、芹沢の制作した見本を元に、弟子が必要な数を染めていくという方法である。この時、色差しの基本となるのは芹沢の作った見本であるが、見本はさまざまに染められた試作の中から選ばれるのが常で、芹沢は1点の注文に対しても、デザインの下絵を描き、それを元に型を彫り、できあがった型を用いて5点、10点、時にそれ以上の試作染を行った。そしてその中から最も気に入ったものを選び出し、見本として弟子たちへ手渡した。見本以外の試作染は、手本として弟子に与えられることもあれば、関係者や知人に贈られ、また自らの手元に残されることもあったという。この折帖に綴じられた散華は、見本にはならず芹沢の元に残ったものと見られる。

瑞々しい色差しの筆遣いは芹沢自身の手になるものと見て間違いなく、表舞台に出ることはなかったが、それ故に型で量産される以前の「うぶ」な色差しを見ることができる。また、一つの配色を決定する芹沢の試行錯誤が伝わってくるもので、制作の一端を示す貴重な資料なのである。

## おわりに

芹沢が初めて散華を制作したと見られる昭和42年の無量光寺本と月江寺本には、絵画的であるという共通点が見られる。写真を元にした無量光寺山門、月江寺本堂の図柄をはじめ、『極楽から来た』の挿絵と共通するモチーフおよび画面構成は、一枚一枚がまるで一幅の絵であるかのように、完結している。それに対して、折帖の試作染から想定される現龍院本の散華デザインは、植物、楽器、雲、水といった単純化された模様からなるもので、おそらくは色彩のバランスに焦点を当てたものと考えられる。法要における荘厳という散華本来

の使途を考えると、花々や楽器を描いた色とりどりの散華が乱舞する様は、さながら極楽浄土を思わせ、知恩院大殿の荘厳飾布の世界を散華で表現したかのようなのである。昭和49年の浄土宗開宗八〇〇年法要にて、印刷とはいえ初めて芹沢散華が法要の中で使用された。この日に立ち合った芹沢も、その情景を目にしたであろう。後に作られた現龍院本のデザインに影響を与えた可能性を指摘したい。

ところで、芹沢が取り組んだ4件の散華制作の中で、無量光寺本、月江寺本、知恩院八〇〇年記念法要本の3件に小川竜彦師が関わっていることは、無視できない。竜彦師が発願した無量光寺本に、竜彦師の詠んだ歌や法然上人の絵姿といった、発願者の意向が強く看取される図柄を含んでいることは、先に見た通りである。また月江寺本に関しては、現在、無量光寺に20数枚の月江寺本の試作染と見られる散華が残されており、仲介者であった竜彦師の存在の大きさが窺われる。

芹沢と竜彦師との出会いのきっかけとなった「法然上人絵伝」および「型絵染法然上人御影」の作画に当たって、芹沢は法然上人の古い版本や絵巻を研究し、また実際に知恩院上人廟や関連の地を巡って、制作に臨んだことが知られている。対する竜彦師も、小説『極楽から来た』が新聞に掲載された際は、物語の考証を含んだ感想の手紙を、連日のように芹沢に当てて送り続けている。染色作家と宗教哲学者という立場は違えども、二人の情熱と、真摯な姿勢には、引き合うものがあったのであろう。掌上に明るく健やかな浄土をもたらししてくれるこの小さな作品が、何よりの証左であるように思う。

## 付記

芹沢銈介作品の調査と掲載に当たり、芹沢恵子様の格別のご配慮と使用許可をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。またご所蔵作品の調査にご高配を賜りました無量光寺の小川竜蔵様、小川明子様、月江寺の藤田高淳様、高橋恵光様、寛永寺現龍院の浦井正明様、多大なるご教示をいただきました土手武彦様、土手千鶴子様、図版転載についてご承諾下さった中央公論社に心より御礼申し上げます。英文要旨については東北福祉大学のKen.Schmidt 准教授にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

## 註



- 1) 『東大寺要録』続々群書類従11 続群書類従完成会 1985年 p41
- 2) 散華の全般に関しては、『銀華』62号「特集：散華 大和の花供養」(1985年夏 pp33-55)、『法隆寺 散華—聖徳太子一千三百七十年御聖諱記念』(法隆寺 1991年 中村元「散華」、河田貞「華(花)籠」、高田良信「法隆寺の散華」)を参照。  
江戸時代以前の散華としては、草花や奈良絵風の人物を手描きし、金銀の箔を散らしたものの等、江戸末期かそれ以前に遡るのではないかとされる唐招提寺森本孝順長老旧蔵の品が知られているが、ほとんどが近代以降のものである。  
なお、興福寺東金堂の木造十二神将立像の像内に納入されていたと伝える薬師如来の印仏は、蓮弁形に裁断した楮紙に押印したもので、十二神将像が造立されたと見られる建永二(1207)年頃の制作と推測される。紙背には結縁者の交名が記されていることから、祈願を込めて納めたもの、ないし造像の勧進のために施印されたのではないかと考えられている。他にこうした例は見られないが、近代以降活発になる寺院復興事業に係る散華を彷彿とさせる点で興味深い。
- 3) 芹沢の文字デザインの評価は高く、それについて取りあげた論考も多い。代表的なものでは、桑山弥三郎「芹沢作品の文字たち」(『芹沢銈介全集』22巻 中央公論社 1982年 pp.161-170)、水原徳言「芹沢銈介作品の文字」(『銀花』58号 1984年 pp.36-41)、芹沢長介・杉浦康平『芹沢銈介の文字絵・讃』(里文出版 1997年)等。
- 4) 小川竜彦。明治33年7月10日、兵庫県尼崎市大島にある宝樹院に父龍碩、母きくの長男として生まれる。京都東山中学を経て早稲田大学文科より大正大学を卒業。昭和4年、無量光寺住職となる。その後、正僧正・嗣講に叙せられ、昭和57年2月8日に逝去(享年83歳)。文筆においては小説家佐藤春夫氏に師事。生涯をかけた法然上人研究の主な業績に『一枚起請文原本の研究』(「一枚起請文原本の研究」刊行会 1970年 ※1984年に国書刊行会より1970年刊行本の合本複製が出版)がある。
- 5) この時、『法然上人絵伝』の挿図の内、既に仕上がっていた10点も同時出展された。
- 6) 小川竜彦「挿絵解説」『工藝』95号 1939年4月 p80
- 7) 佐藤春夫『極楽から来た』講談社 1961年。これは、新聞小説を挿絵も含めて書籍化したものである。
- 8) 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館には、芹沢銈介の弟子で、染色作家の土手武彦氏・千鶴子氏より寄贈いただいた「散華」12枚が収蔵されている。かつて千鶴子氏は芹沢のもとで仕事をされた。その時手元に残ったものの一部で、12枚の内7枚は無量光寺本、5枚は月江寺本に当たることから、両者の色差しは同時に行われたと見られる。
- 9) 小川竜彦「芹沢銈介氏の偉業」『芹沢銈介—作品と身辺のもの』天満屋 1975年
- 10) 印刷版の原本は、無量光寺に保管されている。浄土宗開宗八〇〇年記念大法要での芹沢散華は小川竜彦師の発願になるもので、散華の印刷は無量光寺によって行われた。
- 11) 村岡景夫「型染めの袈裟と水引と打敷」『民芸手帳』194号 1974年7月 pp8-11
- 12) 浄土宗開宗八〇〇年記念大法要に因み制作された袈裟に関しても、竜彦師が御逮夜導師の際に身に纏った七条袈裟が「竹牡丹文」(1965年)であったのをはじめ、「笹に牡丹唐草文」(1935年)、「樹木文」(1966年)、「立木文」(1966年)、「津村山々文」(1967年)等、すでに着物や帯にあった柄を再利用している。
- 13) 『これくしょん』94号「散華絵暦」(芹沢銈介遺文抄(2) ギャラリー吾八 1985年)「かつて金守世士夫氏作木版画の「蓮弁」を頂いたことがあり、先頭、寛永寺現龍院の浦井正明氏から同院で用意された芹沢銈介先生の型絵染「散華」八葉を頂いたことがある。」(p12)
- 14) なお、芹沢銈介の菩提寺である東京都品川区にある最上寺には、生前芹沢自身が納めた現龍院本と見られる散華7枚が保管されている。昭和58年、たよ夫人の百ヵ日に当たり奉納されたものである。
- 15) 別に、スケッチブックから切り離したと見られる1枚の紙が挟まれている。肉筆の散華下書きを表わしたものである。また、折帖の散華が貼りつけられた面の裏側に、畳紙1部と散華1枚が挟み込まれていた。畳紙は「散華 浄土宗 月江寺」とあり、散華は法然上人の上半身を描く無量光寺本の内の一枚である。